

BOOK
REVIEW信用は実に資本であって、
商売繁盛の根底であるみつのおおさきょうがえだな
『三井大坂両替店』

銀行業の先駆け、その技術と挑戦

萬代 悠 著

15a 新書R (以下同)

現在までつながる三井グループ（財閥）の源流は、17世紀後期に三井 高利が江戸で「店前売り、現金、掛け値なし」を謳った呉服店を開業したこととされるが、三井家のもう一つの事業の柱は、両替商である。江戸時代だと江戸では金貨、上方では銀貨、一般庶民は銅銭、が主に使われていたので、両替という商行為の意味は現在よりも広いのだが、両替商とは単に貨幣の交換をするだけでなく、金融一般を意味し、現在の銀行が行う貸付、預かり、為替の発行・換金といった業務を行っていたのである。全国から大阪に集まってくる米の買付と売却は、各藩の年間予算に相当するわけだから、大手で信用できる金融業者でないとできない商行為であろう。なお金貸し業としては、もう一方の雄である鴻池屋がもっぱら大名相手に行っていたのに対し、三井は民間相手の商業金融にほぼ徹していたという違いがある。大名貸しは大きい仕事であるが、時に理不尽な理由で金が返ってこないという大きなリスクがある。民間の商業金融は、その商売の将来性を判断し借主の返済能力を見極める、といった金融技術を高めることでリスクの合理化という最小化を図ることが可能である。

三井大坂の組織と人事には、年功序列で家族主義、退職金制度など、日本の会社の特徴といわれる（た？）要素がすでにこの時点で存在していたことがわかる。店表、いわば営業担当の従業員数は意外と少ない気がするが、だいたい10歳くらいで丁稚（江戸なら小僧）として就職し、元服して手代（＝正社員）となる。この段階では給料はまだ少なく部屋住み身分である。遊所通いも気心の知れてい

るところに息抜き程度に行くのはよいが、給料を前借りまでして行くのはよくないと諭されていたようで、前借りした従業員の反省文が残っているというのも、何となく微笑ましい。

0.12 三井大坂には番頭という職位がなかったのか、その後も身分はずっと手代だが、勤続20年くらいで「支配」になり、これが番頭に相当するらしく、支配になれば食・住が自分で賄えるほどの給料がもらえて、部屋住みから抜けて外からの通勤や結婚も可能になる。支配としてしばらく勤めた後、退職金をもらって独立・暖簾分けという選択肢もあるが、その一方で必要な人材には引き留めのために高い給料が支給され、名代、勘定名代などと肩書も変化して、最高位の「元々」は勤続50年以上である。今でいうなら、大企業の「雇われ社長」にあたるだろうか。

さて、金貸し業である。とくに民間の商業金融となれば、貸し倒れをしないように借り方の信用度を評価しなければならぬ。借金申し込み者の人柄や素行、評判、家族構成とか、店の規模、経営状態、他家からの借金の有無、取引先の評判といった基本的な聞き取りに加え、担保物件（特に不動産）の見積もりも欠かせな

い。三井大坂には調査マニュアルとでもいべき史料が残っており、かつ個々の調査報告書も残っている。現存するのは、享保17（1732）年から明治2（1869）年までの138年間で3825件とのことだ。帯にある惹句から推察すれば、著者がもっとも注力して研究したのは、どうやらこのようである。

著者は現在、三井文庫の研究員である若い文学博士で、三井文庫とは、その名からわかるように旧三井財閥、三井家により保存、収集された社会経済史や美術品を管理する公益財団法人である。そもそも江戸時代の経済活動の話になるとやたら三井が引用されるのは、膨大な記録がきちんと残されていることが大きい。庶民が日常的に利用する米屋、八百屋、床屋、質屋などの小規模商店が同じように動いていたわけでないことは自明だが、残念なことにそうした小店の活動はほとんど記録に残っていない。

それゆえ三井だけを見て江戸の経済を論じてはいけないのであるが、当時の最先端というか頂点の在り方を知るには最高の資料である。老婆心ながら一言モノ申すと、記録を残すことの大切さは医療でも同じである。診療録をきちんと書くことは当然であって、万が一訴訟などがあつたときには、これが重要な論証となる。また変わった症例とかちょっとした気づきでもあれば、短報でもいいから論文化するよう若い人たちに勧めたい。記録が残っていないものは存在しなかったものと後世の人に考えられても、それは仕方がないのが残念なことである。

（以下同）
福家 伸夫 見出しMB31
（東京大学では総合医療センター）
12a 見出しMB31
10a 新書L

結局上に立つしかない

『ヤンキーと地元 解体屋、風俗経営者、ヤミ業者になった沖縄の若者たち』

打越 正行 著

暴走族が一般的に乗るバイクの排気量などのくらいなのかは知らないが、最低250ccはオーバーするだろう。爆音を鳴らしてゴーパチ（沖縄本島を縦断する国道58号線の愛称）を疾走する彼らの集団の後を、50ccの原付バイクで遅れまいと必死に追走する。まったくコミカルなシーンだが、社会学者である著者の調査研究は、そんなふうに体を張って生み出されたものである。

著者は2007年からほぼ10年間、沖縄県内の暴走族やヤンキーと呼ばれる若者たち（ほとんどが中卒）の生活を密着取材し、2019年、その成果を『ヤンキーと地元』（単行本）にまとめあげた。その手法は「参与観察」と呼ばれ、当時の社会学者の目を強く引いた。

著者の参与観察とは、解説の岸政彦氏によるわかりやすい説明を借りれば「他人が暮らし、人生を営むその現場に行き、頭を下げて、手土産を渡し、挨拶をして、酒を飲み、紹介してもらい、紹介され、何とか頼み込んで、それでもなかなか思うようにいかないときもある、地味で地道で、時間と手間のかかる調査」である。要は、暴走族の信用・信頼を得て、彼らに積極的に証言してもらい、信憑性や説得力のある記録を残そうとするところにある。

それにしても涙ぐましい。若者の主たる働き場所となっている建設現場で、同じように作業員として働き、肉体を酷使する。彼らのアジトへの出入りを許されるようになったときには、パシリとして下働きに邁進する。休日でも呼び出されれば、文句を言わず顔を出さなければならない。何度も職務質問を受け、暴走族

の仲間として連行されそうになったこともある。プライドも人間性もいっさいをかなぐり捨て、体当たりで彼らの世界に入り込む。

長期間にわたってこうした体験を積み重ねながら、著者の目に強烈に刻み込まれたことは、地元で生活するうえでの不文律のしきたり、すなわち先輩（シージャ）と後輩（うっとう）の間に厳格に存在する上下関係である。これを嫌ってエイサーなどの地域行事に参加することも厭うようになるが、権力構造や暴力の理不尽さをいかに嘆き、いかに不平不満を抱こうとも、決して口にはしてはならず、ただ上の者には従うだけというヒエラルキーが絶対的に支配する。この社会（＝地元）においては、それに耐えることができなければ見切りをつけ、例えば内地などで活路を見出すしかない（もっともそれで生活が向上するわけではない）。

本書で一番印象に残るのは、幾人もの若者の口から吐き出される、この地では結局「上に立つ」「トップになる」しかない」という繰り返す言。かくしてある若者は、建設現場から離れ性風俗業を経営するに至る。

参与観察という共感や同情に流され

そうだが、あくまで外部観察の位置を保ち、暴走族やヤンキーと蔑視される若者の生態が等身大に描き出される。とりわけ高く評価されるべきは、まったく異質な沖縄書であることだ。沖縄について論じる書籍は膨大だ。しかしそれらはほとんど政治的・歴史的文脈で語られる。すなわち沖縄戦、日米地位協定の不条理、辺野古新基地問題、南西諸島の自衛隊基地強化など、「構造的差別」（新崎 盛暉氏による呼称）に起因する問題なのだ。本書には民主主義や平和憲法などの理念は一切出てこない。同じ差別であっても、著者が浮き彫りにしたのは、沖縄の「大きな」物語でなく、その影に隠れた「小さな」物語である。それは知られなかった沖縄の裏面史であり、それを白日の下にさらした功績はいくら高く評価してもしすぎることはない。

著者は、本書は「記録」であると書く。それを承知のうえであえて注文したい。あくまで本書に限定しての話だが、著者は確かに沖縄の若者を囲む地元の閉鎖的な体質を明らかにした。しかし暴走族やヤンキーは日本各地にいる。DVも日常茶飯事だ。封建的・因襲的体質も決して消えてはいない。では、こうした社会的事実を背後に置きながら、果たして彼が探り当てた若者の生態が沖縄固有の問題として特別視されるのだろうか。そのこの解明・解説が不十分と思えたのは、ぼくの読解力不足か。

期待は募る。その矢先である。2024年12月9日、打越は45歳の若さで亡くなった。仕事に脂が乗ってくる歳だというのに。合掌。

関本 英太郎

ブックレビュー
10a 新書R
8ページ・2000円

BOOK REVIEW

読用

家庭と仕事どちらも両立でき…ません 80% + 20%

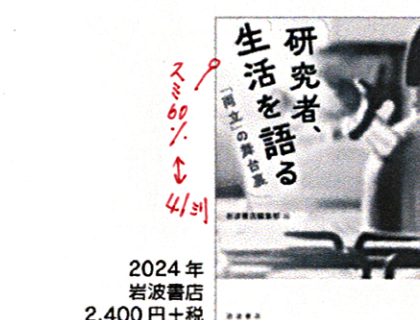
『研究者、生活を語る —「両立」の舞台裏』

岩波書店編集部 編

麻酔科だけでなく、どの科でも専門医の申請・更新には共通講習が課されている。これまでは医療安全、感染対策、医療倫理だけであったが、2026年度以降は医療法制、医療経済、地域医療、医療福祉制度、両立支援も追加された。医療業界で両立支援といえば、患者に対する治療と仕事の両立支援と、職員自身に対する家庭と仕事の両立支援の二つがある。この専門医の共通講習がどちらを意味するのか、書評子はまだ知らない。どちらの両立支援も、専門医であろうとなかろうと医療職に限らず誰にでもかかわりのあることで、正しい理解と実践が求められる。現実はこちらも厳しいのだが。

本書は、後者の家庭と仕事の両立についてである。大学などの研究者の、早朝から深夜までの日常の奮闘記27本が掲載されている。子どもに朝食を食べさせ、保育所に連れて行き、仕事、お迎え、寝かしつけ、もう大変である。もちろん、語るのは女性だけではない。どの話にも迫力がある。育児だけでなく、親や相手の介護の苦労話もある。

うまくやり遂げた、キラキラした成功談は一つもない。どこもが「あれはできず」「これもあきらめ」と現実的な妥協の連続をさらけ出してくれている。あるいは後悔や、トホホな暮らしがあらまに語られる。なるようにしかならないのだから、仕方がない。個人の努力でどうにかできることは、誰もが手を尽くしている。下手をすれば凄惨な話になりそうなのだが、読んでいてこちらまで心沈むことはなかったのは、渦中にありながらも子供の笑顔に救われる瞬間が織り込まれているからだろうか。それに、論文を書く研究者だけあって話のうまい方が



多く、情熱的だったり冷静だったり、あるいは自虐的だったり、面白いページがあるからかもしれない。これは編集者の手腕でもある。

研究職に限らず日本の正社員に求められてきた標準型は、家庭のことは全部妻に任せて仕事だけに邁進し、残業も転勤もできる男性であった。医師も、である。今はとくにそんな時代ではないのだが、昔の風習があちこちに残っていて、ありとあらゆる歪みが個人と家族、とくに女性に降りかかってしまう。まだそんな両立に苦しむ時代である。一昔前に比べれば改善されているのだが、十分には程遠い。本書の登場者も具体的な提案をいくつか挙げている。また、多くの自治体がいそいそと子育て支援策を打ち出している。移住者を呼ぶための競争だが、国全体として整備してもらいたい。

本誌の読者にも、子育て世代がいるだろう。現在進行形だと、本一冊読む余裕など微塵もないに違いない。でも本書は、一人の話は数ページだけなので、ちょびっとずつ読めるかもしれない。研究者と医療職には、違うところもあるかもしれない。なので「そうそう、うちもやわ」「そんな無理一つ」「あ、そうか」と、自分の状況と重ねながら読めるので

は。そしてもっと読んでもらいたいのは、自分の子育てが一段落ついた上司の世代や、自らは子育てにかかわっていない同僚である。子育て真っ最中の当事者への理解の助けになるだろう。もし家庭を放ったらかしにして仕事をしてきたのであれば、これからは家庭を大切にもらいたい。この奮闘記は、どの世代にも響く。そう、院長や教授にこそ、読んでもらいたい。

本書の著者の一人である丸山 美帆子が編者の一人を務めた『理系女性のライフプラン』（2018年、MEDSI）と同じで、研究者が語るところに興味を惹かれて本書を手にとった。医学とはまったく違う領域の研究について少し述べられているのも興味深い。世の中にはこんな研究分野があるのかと、視野が広がる。それにしても、少子化対策が叫ばれるこの時代にまだ両立がこんなに難しいなんて、何か根本的に間違っている気がしてならない。同時に、子育て世代に限らず研究職を支える仕組みが貧弱なのは、どうかしている。あちこちでよく耳にするとおり、ノーベル賞に喜んでいる場合ではなく、もっと基礎研究を大切に政策を大胆に進めてもらいたい。

当たり前だがこの両立に標準や典型はなく、全員に個々の事情がある。本書には研究者だけが登場するが、これは日本中のあらゆる世代のあらゆる人々に突きつけられている社会全体の課題である。さあ、明日も「やたらと卵焼き比率の高いお弁当」で乗り切ろう。

水谷 光

（市立貝塚病院 麻酔科・中央材料室）